

実践報告

平成 25 年度文部科学省「スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業」 (大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業) の取り組み

The report of project of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology "local community activation enterprise which led the sport" (local community activation promotion enterprise which utilized the sport resources of the university and the company) in 2013

太田あや子、福島邦男、玉木啓一、河合一武、桂 和仁、杉山仁志、高橋琴美、
中村達也、荒川 崇、山村 伸、佐藤亮輔、鈴木 宏、佐久間淳、

田中 忍* (聖カタリナ女子大学)、高橋こずえ** (武蔵丘スポーツクラブ)

Ayako OTA Kunio FUKUSHIMA Keiichi TAMAKI Kazutake KAWAI Kazuhito KATSURA
Hitoshi SUGIYAMA Kotomi TAKAHASHI Tatsuya NAKAMURA Takashi ARAKAWA
Shin YAMAMURA Ryosuke SATO Hiroshi SUZUKI Jun SAKUMA
Shinobu TANAKA Kozue TAKAHASHI

Abstract

平成 25 年度に吉見町と連携して、文部科学省「スポーツを通じた地域コミュニティ活性化事業」(大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業)の助成事業を実施した。6 種類のスポーツイベントを実施し、のべ 1,300 名を超える町民の参加者を得て目標を達成することができた。

It cooperated with Yoshimi-machi in 2014, the promotion services of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology "local community activation enterprise which led the sport" (local community activation promotion enterprise which utilized the sport resources of the university and the company) were carried out.

, and exceeds 1,300 person participated Six kinds of sports events, and the aim was able to be achieved.

1. 初めに

平成 25 年度の文部科学省「スポーツを通じたコミュニティ活性化事業」(大学・企業のスポーツ資源を活用した地域コミュニティ活性化促進事業)に、武蔵丘短期大学が学校所在地の埼玉県吉見町と連携して取り組んだ。この事業は大学のスポーツ資源(人材・施設)を活用した地域コミュニティ活性化を趣旨とする事業であり、大学と連携した地方公共団体(自治体)が応募し予算を獲得する。今回は吉見町生涯学習課生涯スポーツ係と本学との取り組みを総括する。

2. 事業の概要

この事業は地方公共団体(自治体)が、地元の大学等が保有するスポーツ資源(人材、施設)を効果的に活用した取組を実施することにより、地域住民の運動・スポーツへの参加意欲を高め、スポーツを通じた地域コミュニティの活性化を促進することを目的としている。

事業内容は、地方公共団体が大学や企業、スポーツ団体と連携を図り、大学や企業のスポーツ施設等において、大学教員や学生等による地域住民を対象とした定期的なスポーツ教室、スポーツセミナーなどの指導やスポーツ交流大会、筋力トレーニング等を実施することとしている。

3. 応募までの過程

自治体が応募する形を取っているが、今回は本学から吉見町に情報提供し、町の生涯スポーツ係担当職員(生涯学習課長、生涯学習係)と協力して実施事業を検討し、書類作成を行った。情報入手は 2 月初旬、書類提出締め切りが 3 月 21 日と 2 ヶ月あまりの短期間での作業となった。

3-1. 事業計画書作成

平成 25 年 2 月 6 日に筆頭著者の太田が監事を務める(社)全国大学体育連合からこの事業に関する第 1 報がメールで届き、本学学長に相談し協力自治体を検討、4 自治体に事業の情報を提供し、本学の

連携の意志を伝えた。その結果、地元吉見町から連携して応募するとの返答を得た。他の自治体のうち 2 つはすでに平成 25 年度予算が確定しており、「補正予算」で対応することが困難であることを理由に、1 つの自治体は toto (サッカーくじ) 助成に申請中であることを理由に断られた。

吉見町は本学の所在地であり、すでに武蔵丘短期大学と連携協力の協定書を交わしており、健康づくりや栄養指導、介護予防等の事業で協力関係があった。今回は文部科学省関連の事項であったため、関係する生涯学習課長と生涯スポーツ係長に連絡し、事業の説明を行った。そこで検討事項を 2 点指摘された。まず、既に平成 26 年度の町の予算が議会決定されているため、「補正予算」の対応が必要なこと。次に、町の議会承認を得られるのが 6 月になるため、事業への取り組み開始が 7 月になることであった。生涯学習課長が関係部局と連絡を取り、補正予算の取り扱い、議会スケジュールを確認して応募の方向に動き出すことができた。その後大学事務局長と太田が町長を訪問し、事業概要を説明して理解を得た。2 月中旬に町の担当者 2 名と太田が文部科学省の担当課を訪問して、書類作成に関して相談し、担当官から「事業の考え方」、「予算作成のルール」など、作業に必要な有効なアドバイスを得、書類作成を開始した。3 月 5 日に吉見町に A4 サイズ 1 枚の「参加表明書」を町長名で作成するよう依頼し、3 月 11 日付けで文部科学大臣宛に文部科学省に提出した。その後、締切り日に向けて以下の 2 種類を作成した。

3-2. 予算書作成

事業ごとに文部科学省の書式に従って予算を作成した。主な費目は「謝金」、「旅費交通費」「消耗品」である。消耗品費は全て「商品番号」、「業者名」、「単価」の記載が必要だったため、スポーツ用品、事務用品など 200 を超えるアイテムを太田・高橋こずえ 2 名でインターネットを検索して調べ書類を作成した。予算にはこの事業を担当する臨時の職員 1 名を実施期間中 (7 月から翌年 3 月) に時給で雇用する経費も含まれている。

以上の書類を作成し関係者で検討した結果、最終事業案を決定した。その際には実施の可能性 (町担当者、短期大学担当者、関係スポーツ団体や町民のスケージュール等) を検討し、当初案からいくつかを削除することとした。その結果以下の 5 つの事業に取り組みすることになった。

1) ファミリースポーツ教室 家族、障害者、女性

対象 1 種目

- 2) シーズンスポーツ教室 一般市民対象 1 種目
- 3) 健康教室 成人対象 2 種目
- 4) スポーツ教室 子どもと成人を一緒に 7 種目
- 5) 定期教室いきいきスポーツ教室 成人対象スポーツ 4 種目
- 6) 千人の体力測定 成人対象

これら 6 事業に即した必要経費を算出して最終的な予算書を作成し直し、平成 25 年 3 月 21 日に吉見町の担当者からメールで「事業案」とともに「予算案」を提出した。

4. 書類提出から事業実施準備

平成 25 年 4 月に文部科学省の外部審査委員会で審査があり、「内定」の連絡を受け、5 月の国会での予算成立と同時に「正式決定」した。それを受けて、6 月の吉見町議会で承認され、補正予算が成立し、6 月 12 日付けで長町名の事業計画書を文部科学省に提出した。

この間に、予算に関して文部科学省担当官と折衝し、予算の規模を約 900 万円から 700 万円に縮小することになった。また、この事業の専任者として武蔵丘スポーツクラブのクラブマネージャーで 1 年間の経験のあった本学卒業生の高橋こずえ氏を推薦し、事業を開始する 7 月から翌年 3 月まで町の臨時職員として町民体育館に勤務することになった。

事業実施にむけて 7 月 20 日に全体打ち合わせ会を武蔵丘短期大学で開催し、町の行政、短期大学、スポーツ少年団指導者、体育協会等関係者総勢 30 名余が一堂に会して事業に関する全体説明会と事業別会議を開催した。

5. 事業実施

1) ファミリースポーツ教室

日程：12 月 22 日ファミリースポーツ教室①、

1 月 18 日ファミリースポーツ教室②

参加者：40 名+13 名=53 名

大学担当者：2 名 (福島 邦男、荒川 崇)

学生ボランティア：1 名

内容：専門指導者による実技指導と体験を合わせた半日のイベント。1 回目にボッチャ、2 回目にフライングディスクの健常者も障害者も共に楽しめるニュースポーツのイベントを 2 回実施した。

参加者たちは、初めて体験するニュースポーツに

興味津々で活動していた。ファミリースポーツ教室を通じて、普段見ることのできない子供の姿、親の姿を見ることができ、親子のコミュニケーションを深めるきっかけとなった。

主に家庭を持った女性や障害者が家族や友達同士で参加することを目的としていたが、障害者、女性の参加は少なく、父と子という親子での参加が多かった。

また、障害者を対象としたスポーツ活動を行うには、人手や安全に活動できる環境づくりなど準備が必要となり、健常者、障害者ともに活動するためには解決すべき課題があることがわかった。

2) シーズンスポーツ教室5回(全町民対象)(実施日程順)

日程：8月9日(金)、10日(土)、23日(金)、26日(月)、27日(火) 各回13:00~15:00

参加者：37名+36名+27名+30名+30名=160名

大学担当者：2名(太田あや子、真島枝里子)

外部有資格指導員：3名(資格：ベーシックサーフライフセーバー、水泳指導員等)

学生ボランティア：のべ53名

卒業生ボランティア：4名

内容：短期大学の屋外プールを町民に開放し、学生による水泳指導が受けられる教室を開催した。参加者の多くは小学生だったため、学生1名につき最大4人を班員とする能力別男女別班編成(6~8班)を行い、20~30分泳いで10分休憩して3回入水するプログラムで実施した。参加者の最高齢の70代の女性1名、また中学生1名にはマンツーマンで水泳指導を行った。指導内容は、参加者のレベルに合わせ、学生が考えた内容を実施し、バタ足チームやクロールチームなどを中心に実施して泳力の向上に努めた。自由時間には、学生とともに足ヒレやフラフープなど道具を使用して子ども達は楽しい時間を過ごした。

教室の広報は町の広報誌と町の全小学校でのチラシ配布で行ったが、申し込みが殺到し希望者全てを受け入れることができなかった。

子どもの指導を担当したボランティア学生は水泳の授業での学習を活かして指導内容を考え、子どもに合わせて工夫するなど熱心に指導に取り組み、その様子をみた町の関係者や学長からもお褒めの言葉

をいただいた。

3) 健康教室イベント

日程：11月24日ノルディックウォーキング教室、12月1日 ロコモ予防運動教室

参加者：29名

大学担当者：2名(福島 邦男、田中 忍)

学生ボランティア：1名

内容：成人や高齢者を対象とした健康づくり教室イベントを2回開催し、新しい健康づくり活動への参加のきっかけを提供した。

以下の2種目を健康センターや包括支援センター等町の健康づくり部門やスポーツ推進委員と連携して各1回実施した。

1) ノルディックウォーキングイベント

ノルディックウォーキング指導後町のウォーキングコースを散策する

2) ロコモ予防運動イベント

骨密度測定、ロコモチェック、ロコトレ、シナプソロジー体験

ノルディックウォーキング教室は、小学生~高齢者まで幅広い年齢層の方に参加を得て、ノルディックウォーキングの歴史や効果などの知識から実技まで幅広く学んだ。参加者は2時間でノルディックウォーキングの効果を実際に体感することができ、今後も継続してやっていきたいという声が多く、とても好評だった。また、参加者全員で楽しく会話をしながら、町内のウォーキングを行い、吉見町の自然を見ることができた。

ロコモ予防運動教室は、参加人数が少なかったが、骨密度測定やロコモティブシンドローム(運動器症候群)による足腰の衰えを予防するためのロコモチェック、ロコモ予防の体操、さらに認知症予防のシナプソロジー体験といった盛りだくさんの教室内容となった。参加者から積極的に質問が出て、健康づくりの意欲向上につながった様子が伺えた。

両教室とも、予定参加人数を大幅に下回ったことについての反省点があげられ、広報の方法や教室の内容の伝達に課題が残った。子どもを対象とした教室と比べて、大人を対象とした教室は参加率が低いことが分かったが、今後もノルディックウォーキングとロコモ予防を普及していくことを町の担当者として確認した。

4) スポーツ教室

一流選手またはチームによる模範演技と練習会、シンポジウム講演会と交流会を組み合わせた半日のイベント。以下の 7 種目の町の体育協会加盟団体や少年団と連携して実施した。町の体協加盟団体やスポーツ少年団を中心にイベントに参加、運営を担当した。

以下の 6 種目の教室を実施し、天候不良でサッカー教室の開催を取りやめた。

- ①ランニング 137 名
- ②野球 49 名(アトラクション参加数約 30 名)
総数 79 名
- ③剣道 33 名
- ④バスケットボール 105 名
- ⑤柔道 36 名
- ⑥バレーボール 86 名

以下に各教室の詳細を報告する。

①ランニング教室

日程：9 月 23 日(月) 8:30～12:10 吉見ふれあい広場陸上競技場

参加者：137 名

指導協力：しまむら陸上競技部（企業女子駅伝チーム）監督、コーチ、選手 8 名の計 10 名

大学担当者：1 名（中村 達也）

学生ボランティア：0 名（授業のため）

内容：初めに陸上部員による講演(シンポジウム形式)で、しまむら陸上部や選手の陸上競技歴や競技を始めたきっかけなどの紹介があった。その後準備体操後に走り方の指導があり、最後にイベントとして「選手と一緒にリレー」と「1000m 世界記録ペース 3 分 20 秒に挑戦！」が行われた。

しまむら陸上競技部の全面協力のもと、運動会シーズンということもあり、少年団以外の多数の参加者が集まった教室となった。講演では選手の人柄や競技への情熱が子ども達にも伝わり、実技指導とともに子供たちにとって有意義な時間となった。

②野球教室

日程：11 月 1 日(日) 8:30～12:10 吉見町ふれあい広場野球場

参加者：79 名（うち 30 名がアトラクション参加者）

指導協力：埼玉西武ライオンズアカデミーコーチ 2 名（埼玉西武ライオンズ OB 選手：鈴木健氏、土肥義弘氏）株式会社西武ライオ

ンズ 事業部コミュニティ担当者 3 名
計 5 名

大学担当者：2 名（太田 あや子、田中 忍）

学生ボランティア：5 名（武蔵丘短期大学野球部員他）

内容：野球少年団の団員を対象にキャッチボール、守備（野手、投手別）、ティーバッティングの三部門にわたる実技指導の後、二人の OB コーチの野球人生を語り、子どもの質問に答える講演会を実施した。また、アトラクションとして球団からティーバッティングとストラックアウトの用具が提供され、参加者の家族やイベント見学者が参加して楽しんだ。

野球少年団員にとっての元プロ野球選手の指導を直接受けられる良い機会となった。

また、講演でプロ選手への道のりが理解できた。アトラクションも幼児から高齢の女性まで幅広い年齢層の多くの参加者を得て盛況だった。

学生ボランティアの本学野球部員にとっても、子どもと一緒にプレーをすることにより、プロ経験を持つコーチによる子どもの指導方法を学ぶ良い機会となった。

③剣道教室

日程：12 月 15 日(日) 13:00～16:00 B&G 体育館

参加者：33 名

指導協力：伊田テクノス剣道部 5 名

大学担当者：1 名（太田 あや子）

学生ボランティア：0 名

内容：地元企業の実業団チームに所属する現役選手を講師に招いて教室を実施。

橋本桂一選手の剣道人生についての講演と質疑応答に続き、準備運動、基本稽古（基本的な素振り）、部員による模範試合、合同稽古を実施した。

寒い時期の開催であったが、暖房機も用意された中での開催となった。防具の扱いに不慣れな小学生は保護者の手を借りて用意し、少年団や卒団生、指導者などが一流選手から多くのことを学ぶ機会となった。

④バスケットボール教室

日程：12 月 23 日(月) 祝 13:00～17:00 吉見町民体育館

参加者：105 名

指導協力：元プロバスケットボール選手・元埼玉ブロンコス監督チャールズ・E・ジョンソン氏、GANBAX-BS のコーチ 2 名の計 3 名

大学担当者：1 名（山村 伸）

学生ボランティア：7 名（武蔵丘短期大学男女バスケットボール部）

内容：元米国プロバスケットボール選手・元埼玉ブロンコス監督チャールズ・E・ジョンソン、GANBAX-BS のコーチによるバスケットボール教室。ボール慣れ（ウォーミングアップ）、ドリブルやシュート練習の後、フリースロー対決やミニゲームを行った。その後チャールズ・E・ジョンソン氏の講演（チャールズ・E・ジョンソンの歴史～幼い頃のころのことからプロ選手になるまでと監督時代～）

少年団を中心とした教室となったが、普段とは異なる外国人からの専門的なコーチングを受けることができた。ボランティアの本学学生にとっても新しい世界を知る機会となった。

⑤柔道教室

日程：12月23日(月) 祝 13:00～17:00

吉見町民体育館

参加者：36名

指導協力：廣川 浩二氏（比企郡市柔道連盟理事）、矢場 光夫（吉見町柔道会会長）の2名

大学担当者：1名（鈴木 宏）

学生ボランティア：2名

内容：国際大会出場経験を持つ先生から柔道について学ぶ教室。柔道の歴史についての講演の後、受け身、立ち技、寝技の実技指導を行った。その後、講師の柔道人生について（幼少時代から現代まで）の講演を行った。

⑥バレーボール教室

日程：平成26年1月19日(日) 9:00～12:00

武蔵丘短期大学体育館

参加者：86名

大学担当者：2名（杉山 仁志、佐藤 亮輔）
他コーチ1名

学生ボランティア：7名(女子バレーボール部)

内容：武蔵丘短期大学の女子バレーボール部にバレーボールの実技を学ぶ教室。準備体操後に基本練習（トス、アタック、サーブ、レシーブ）

後に大人と子どもの混成チームでミニゲーム、大学チーム VS 小学生チームのゲームを行った。

⑦サッカー教室

日程：平成27年（降雪により中止）

元Jリーガーで現在大学教員のリウヨン氏を迎えての練習会を企画したが、大雪のため開催を断念した。

5) 定期教室（いきいきスポーツ教室）

日程：11月16日硬式テニス、24日インディアカ、30日卓球、12月8日ゴルフ

1月11日ゴルフ、12日硬式テニス、18日ゴルフ、19日卓球、26日卓球・硬式テニス（コートコンディションにより延期）

2月1日ゴルフ・硬式テニス、8日ゴルフ・硬式テニス（降雪により中止）、9日卓球（降雪により中止）15日硬式テニス（降雪により中止）、16日卓球（降雪により中止）

参加者：前半（アラカルト）10名+6名+10名+11名=37名

後半（ゴルフ）9名+4名+9名=22名

（テニス）3名+7名=10名

（卓球）4名+6名=10名

大学担当者：5名（川合 武司、桂 和仁、福島 邦男、佐藤 亮輔、長島 洋介）

学生ボランティア：0名

内容：成人を対象とした8回の定期教室。前半の4回で4種目のスポーツを1種目ずつ体験し、後半の4回で1種目を選択して上達を目指して練習するアラカルト方式のスポーツ教室。

降雪などの悪天候で後半の教室を4回実施することができなかったが色々な世代、性別の町民が無理なく和気あいあいと楽しめる教室となった。参加していた方が他の教室に参加している姿を多く見ることができ、この教室をきっかけにスポーツ活動に意欲的になった方が増えた。複数回教室を実施したため、参加者同士の仲が深まり、教室の休憩時間や終了後に話をしている姿よく見られた。町民同士のコミュニティの活性化という部分で大きな成果が見られた教室となった。

多くの種目を体験できるのは魅力的だが、全部には参加できないなど長期にわたって参加者の日にちを確保するのが難しく参加者は多くはなかった。ま

た、大学教員の長期にわたる日程の調整が難しい点があった。

6) 千人の体力測定 (町の成人対象)

日程：9月1日(土)、22日(日)、11月3日(日)、9日(土)、10日(日)、21日(木)、24日(日)の7日間

参加者：64名+102名+188名+46名+29名+50名+76名=555名

大学担当者：4名(太田 あや子、玉木 啓一、高橋 琴美、荒川 崇)

学生ボランティア：のべ37名

内容：町の健康・スポーツイベント(各種スポーツ大会、健康まつり)等に体力測定ブースを出し、文部科学省新体力テストや各種健康体力測定(「握力」、「開眼片足立ち」、ロコモ予防の「椅子立ち上がり(40cm)」、「骨密度」等)を行い、その場で結果を説明し、運動メニューを提供した。

町最大のイベントである町民運動会が悪天候のため中止となり、目標とした千人には届かなかったものの、五百余名もの町民の協力を得て測定を実施することができた。学生ボランティアは担当教員のゼミ生やアクレティックトレーナーを目指す部員が中心となり、専門的な測定を正確に安全に実施した。

6. 事業実施の成果

(当該事業を実施したことによる大学としての成果は以下のようにまとめられる。

①本学が吉見町の町民の方々にとって身近に感じられるきっかけとなった。

短期大学の施設を利用した事業に参加したり、高齢者や子どもを送り迎えするために出入りしたりすることにより、教員や学生と直接コミュニケーションを取ったことにより、「大学の存在が身近になった。」「大学が何をしているかがわかった。」という感想を耳にした。開学から20数年間を経て「初めて短大に足を踏み入れた。」という声も複数有り、短大に対する理解が深まるきっかけとなったと考えられる。

②学生のよい学習経験の場となった

教室で子どもに教えたり、イベント運営を手伝ったりするボランティア経験をとおして、学生は人とのコミュニケーションの取り方や指導法を学ぶ必要に気づくことができた。また、学んだことやできる

ことを駆使して指導する方策を考え、対象者の能力向上が見られたり、町民から感謝の言葉をいただくことから、自信を得たり、各自の適性を理解したりする機会ともなった。本事業でのボランティア活動は今日の大学教育に欠かすことのできない「学生にとっての『アクティブラーニング』(中教審)の場」となったと考えられる。

③学生のボランティアへの意識が高まった

ボランティア募集情報やボランティア参加学生の体験談を聞くことにより、その後の学内でのボランティアに参加する気運が高まった。参加した多くの学生は、ボランティアを学生生活における重要な課外活動として位置づけ、卒業後の進路を考えるのに役立っている。

④教員にとって学生の様々な能力を確認することができた

普段は「教わる側」である学生が、立場を変えて「教える側」や「情報を伝える側」に立って活動する様子を教員が直接的に見聞することにより、通常の結果や学生の力量を確認することができた。事業を通して町民と積極的に会話をかわす学生の姿をみて、普段とは異なる学生の良さや能力を再確認できた

⑤教員の指導能力の向上

学生とは異なる対象者に対しての指導法を工夫し確認する機会となった。また、町民や町の担当者とコミュニケーションを通じて生涯スポーツ指導者としての可能性や立場を確認することができた。

⑥町のコミュニティ活性化に本学が役にたてる方策が明確になった。

短期大学の教員や学生が町の行政やスポーツ団体の担当者と直接コミュニケーションを図ることと通じて、フェイス トゥ フェイスの情報交換ができ、事業終了後の次年度に向けた事業計画が具体化した。

それはシーズンスポーツ教室を平成26年度は町で予算化して継続することになった。その他の事業は短期大学を拠点とする「武蔵丘スポーツクラブ」に活動を引き継いで、今回の町の参加者のスポーツ活動の継続を支援していくことになった。

また、今回、行政側の事業計画や予算策定、議会承認などのシステムやそのスケジュールを短期大学側が把握することができたので、今後の連携事業をよりスムーズに運ぶことができるものと思われる。尚、今回の委託事業の予算は、各事業終了後に「事業の実施報告」と「経費支払い報告」の2つを文部

科学省へ報告したのち、最終報告書を翌年度4月に提出し、翌年度(26年度)に支出した経費が町に支払われる形式をとっている。

7. 本事業の成果を今後のコミュニティ活性化に活かすための課題

事業を実施して明らかとなった課題は以下のとおりである。

- ①希望者が殺到して断らなければならない事業があり、募集方法に工夫が必要である。
- ②町や短期大学の運動施設のスケジュールを前年度に調整しておく必要がある。
- ③学生ボランティアの確保のため、コミュニティ活性化などの地域貢献事業でのボランティア活動を単位化するなどの方策を考える必要がある。
- ④専門家(アスリート)への謝金の金額設定が十分とはいえない点を補う方法を考える必要がある。

8. 終わりに

本事業の成果は平成26年2月26日文科科学省で開催された報告会で報告し、4月に文科科学省に長町名の報告書を提出して終了した。総予算6,584,838円のところ、実際の決算額は2,917,995円であった。これは悪天候による教室の中止等による謝金支出や消耗品購入支出が大幅に少なかったことに起因する。

本事業の「町と短期大学が協力してコミュニティを活性化する」という目標はある程度達成できたものと考えられる。これは短期大学の施設の優先利用や短期大学の教員の3分の2の事業参加など短大の協力体制によるところが大きいと思われる。事業に関わった教員には短期大学の通常の業務に加え、企画調整、実際の指導や運営担当などあらたな仕事が課されることになったが、今回の町との連携事業は今後の地域と短大との良好な関係の維持や、連携協力に必ずや役に立つものと考えている。

最後にご協力いただいた町の関係者の方々、短期大学関係者に感謝の意を表したい。



ファミリー教室(ボッチャ)



シーズンスポーツ教室(水泳)



健康教室



健康教室（ノルディックウォーキング）



スポーツ教室（野球）





スポーツ教室 (柔道・剣道)





スポーツ教室（ランニング）



スポーツ教室（バレーボール）





スポーツ教室（バスケットボール）



いきいきスポーツ教室（ゴルフ）（卓球）



千人の体力測定

